

横浜ダンスコレクション2016 コンペティション I

コンペティションIでは、15カ国133組の応募者から映像審査を経て、振付家9組が本選に臨み、上演審査で各審査員が採点した集計結果を踏まえて約1時間の議論を行い「審査員賞」受賞者を決定。奨励賞は、「審査員賞」に届かなかったものの今後の更なる活躍を期待して贈られた。「若手振付家のための在日フランス大使館賞」は、上演の成果に加えて各振付家にインタビューを行い、フランス研修中に必要なコミュニケーション力を考慮して、フランス人審査員3名により選出された。「Touchpoint Art Foundation賞」と「MASDANZA賞」については、各フェスティバルのディレクターが直接選考し各賞を手渡した。創造性を鮮やかに表現するコンテンポラリーダンスの分野で、振付の独創性は一つの評価軸であり、さらに構成・演出を超越していく身体の可能性に向ける独自の視線に着目して審査に臨んだ。美術や音・音響を含めて演出に個性がひかるAokid×橋本匠、繊細に積み上げる構成により一瞬にして強いエモーションを放った浜田純平、区切られた空間にある身体を遥か彼方の他者へ捧げた伊東歌織等のファイナリストが作品創作を継続して更に飛躍されることを心から願う。創設から21年目を迎えた今回、過去最も多くの海外のダンス専門家を招へいして、ダンスの可能性を世界へ発信する横浜が、創造の未来へ大きな役割を担っていることは間違いない。

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 チーフプロデューサー 小野 晋司

今年もまた、横浜ダンスコレクションは日本のコンテンポラリーダンスの重要なイベントであることが証明された。どの応募者も才能豊かに独自の表現の世界を展開したが、その中で浜田純平は、すぐれたダンステクニックとコレオグラファーとしての感性、ステージ上での存在感から、「若手振付家のための在日フランス大使館賞」を受賞した。浜田にはアーティスト・イン・レジデンスとしてフランスに数か月間滞在し、現地のコレオグラファーやダンサーと交流して作品を発表する機会が与えられる。

その他の賞の受賞者も、それぞれの実力を十分に発揮して魅力ある舞台を創り上げた。今後の活躍と成功を祈念したい。

審査員賞は、Aokid×橋本匠の個性と創造性にあふれる作品に授与された。「四角形のゆううつ」で奨励賞を受賞した伊東歌織と合わせて祝福したい。

在日フランス大使館文化担当官 ディアーンヌ・ジョス

ダンスの枠組みを揺さぶる作品と、深さで未知の領域に達しようとする作品とが、成果を競い合った2日間。ゆるさと密度、考え抜かれた構成とアイデアの斬新さ、異次元の価値観が交差する場合は、もはやコンペティションという形には収まらないのかもしれない。審査員賞と奨励賞を正反対の個性のAokid×橋本匠「フリフリ」と伊東歌織「四角形のゆううつ」が受けたのも当然といえば当然。そのなかで海外の賞をダブル受賞した渡辺はるか、将来性やダンサーとしての魅力という、じつにシンプルなところで際立っていた。

いろいろな背景や評価軸を持つ人の目にさらされることこそダンコレの醍醐味。

海外への扉を開くためには、英語の準備も必須だ。

舞踊評論家 新藤 弘子

短評／尾花藍子氏は見てもらうのではない見せる強欲さもあると良い。20代前半の浜田純平、渡辺はるか両氏は、今後その身体の必然を伴った表現を徹底的に追求して欲しい。Aokid×橋本匠両氏には業を背負わせたつもり。彼らと共に進むダンスを見たいと思う。チョン・ Cholイン氏は圧倒的な身体。もっとダーティーな世界に行けたのでは。高橋萌登氏は良い作品だったがもっと圧倒されたい、溢れて欲しい。伊東歌織氏は完成度が一番高かった。奨励。大園康司・橋本規靖両氏は特に後半、もっと自らの表現を信じて良い。飯森沙百合・西山友貴両氏は決定的に良いダンサー、もっと技術を疑える。

総評／わざわざ人前で踊る切実さが見たい。踊りたいだけなら独りで踊れ！見せたいなら見る！ビバ！ダンス！

東京デスロック主宰 / 富士見市民文化会館さきり☆ふじみ芸術監督 多田 淳之介

既存のコンテンポラリーダンスの定型を脱臼させ、逸脱していく作り手の登場がうれしい。審査員賞Aokid×橋本匠『フリフリ』は、一見ただふざけているだけのように見せつつ、次々と畳み込むように既成のダンス観をずらしていく。その手際はよく見るようできて何かが新しい。大園康司・橋本規靖の緩やかな脱臼にも心惹かれるが、今回は後半の展開が弱かったのが残念。奨励賞の伊東歌織『四角形のゆううつ』は、不思議な魅力に満ちていた。在日フランス大使館賞の浜田純平は、未完成ながら大きな可能性を感じる。渡辺はるか、高橋萌登、飯森沙百合・西山友貴はいずれもダンサーとしての魅力が際立っていた。

新書館「ダンスマガジン」編集委員 浜野 文雄

今年で21年目を迎えた「YOKOHAMA DANCE COLLECTION」。さらっと21年と書いたが、「21年前に生まれた人が21才になる年月だ」とたわいのないことを考えると、これはなかなか実現できることではない。毎年新たな才能の出現に対する期待感に満ちた「コンペティションI」「コンペティションII」に加え、アジア・セレクションやスペシャル・プログラムなど盛りだくさんな内容で開催された今年は、ちょうど同じ時期に開催されていたTPAM（国際舞台芸術ミーティング）とも相俟って、国内外から集まった多くのプロフェッショナルを含め大きな注目を浴びることとなった。

ぼくが審査員の一人を務めた「コンペティションI」は、残念ながら最終審査に残ったマレーシアの作品が上演できず、韓国のチョン・チョルインによる作品と日本人による8つの作品の計9つの作品で最終審査が行われた。審査結果はHPなどで公開されている通りなので、ここでは、残念ながら最終審査に漏れた多くのエントリーを含めた作品総体について、ほんの少しだけ個人的な所感を記したい。

ここ最近の傾向は、一言で書くと「ダンス技術の向上」と「踊る根拠の不明瞭さ」にあるように思う。特に「コンペI」に応募してくる作品では「ダンスとしては特に過不足のない」パフォーマンスが多い。ただ、それを人前で見せる作品として構想しているのであるとすれば、それだけではもちろん十分ではない。作品が作品として自立するためには、「踊る動機・踊る根拠」は当然必要で、さらにその作品が見るものに何らかの“作用”を及ぼす強度を持つことが求められる。「コンテンポラリー・ダンス」は自由度の高い、つまり「やろうと思えば何でもできる」アート・フォームだと思う。それゆえ、観客を前提にしたダンス作品を構想するのであれば、振付家、そしてダンサーには「踊ること」への集中だけではなく「その踊り（ダンス）がいったいどのように見えるのか。」「（見るものに）どのような作用を及ぼし得るのか？」ともう一度問いかけ直してほしいのだ。

東京芸術劇場 プロデューサー / Realtokyo ディレクター 前田 圭蔵